



子供讃歌(11)

倉橋惣三

10 父親の旅

1 我が子の写真

—『幼児の教育』第49巻第8号

(1949年) から —

『何をしているの』

『子供達にも見物させているのさ』

『あゝ、子供さん達の写真だね』

『そう。こうしていると、いっしょにナイ(ヤ)

ガラ見物をしていることになる』

『ハハハ、なるほどそうだね。君らしいな』

水しぶきのかゝる瀧見台である。前面にはナイヤガラ大瀑布の壮観がある。同行の友人は、しきりにその雄大な絶景に見とれていたが、ふと、並んで立^たっている彼がポケットから何か出して、瀧の方へ向けているのを見つけて、こういう問答がはじまったのである。

彼は外遊に出る時から、三人の子供の写真を持

って来た。はだみはなさずという程ではないが、名所見物とでもいう場合には、それを携行して、こんな風の具合にして独りでいゝ気もちになっているのである。船の上でも、朝夕の空と波との眺めを、デッキに立ってこうして見せた。ハワイのバナナ林も見せた。ゴールデンゲートの平和の女神の像も見せた。見せたというよりは一しよに見た。このナイヤガラは、きつと一番喜ぶだろうと思って来たところである。幼稚園へ通っている男の子と、次の男の子と、その次の女の子と、三人がそれぐの表情で楽しそうに見物している、と彼は思っているにこゝしている。初めのうちはそつとしていたが、今ではもう大びらで平気である。何も、船室やホテルの夜そつと出して見るというようなセンチメンタルな仕業でもなければ、ホームシック的行動でもない。人前を憚^{はば}ることもない訳だ。そして、此のあと彼の旅行中ずつと続いた。ニューヨークの摩天楼でも、ロンドンのウェストミンスターアベーでも、パリの凱旋門でも、ハーゲンベクの動物園でも、アルプスの山の上でも、ベスビヤスの

遠望でも、……港外から見る神戸まで続いた。

我が子らの写真携帯ということは、彼の自分の思いつきだったが、後に、後も後も後に、あの米國教育使節団が来た際、団長スタッダード博士との話が、日本側教育委員としての資格でない個人的な会話になった或る時、体軀巨大な博士が上着の内ポケットから愛児らの写真を取り出して、スマイルしながら彼に見せたことがある。彼はあなたの國へ行った時にわたしもといって、互に声を立て、笑ったが、おやばかは——英語でなんというのか知らないが——人類共通だと思った。

おやばかは兎に角として、旅というものはどんな楽しいものにしても、有益なことにしても、一般にいつて家庭生活に対する空白期間である。その空白は当人にも家族にも同じことだが、家郷をおもうという感じは、異境に旅している身の方に多かるう。それも、万葉の相聞歌のような切々綿々たるものは別として、波濤万里、我が子らと共にいないということは、親の生活として大きな空白である。せめても、写真親子でがまんするもの、

耐え忍ぶのは感情で、家庭生活の空白による家庭教育の空白はどうしようもない。勿論、父親がいなくても、うまくいつているに相違ないし、留守教育には留守教育としての特殊な味が出るものとしても、いっしょにいないくは父らしい眞の存在とならない、——これは理屈でなしに、旅に出て彼の痛感した実感である。お土産を待っているにしても、時折りチョコレート位送って貰ったとて、父は實際そばにいないのである。子供達にとっても大きな空白に違いない。——彼は、子供の研究のため、この空白を我が子らに与えている訳である。

そんなこんなで、彼の子供研究が、施設における子供の生活よりも、家庭における子供の生活殊に親と子との関係の方に、より深き機微の関心を誘ったのは、学問的よりも人間的な自然であつたともいえよう。少くも、家庭を土台とすることなしに、児童施設を考えることはできないという彼の日頃の思想が、一層切実になつて来たことは、長く我が子らに留守をさせている父の心としての事実であつた。我が子に与える幸福以上に何んの

親の幸福があろう。親による幸福の外何んの子の幸福があろう。

家庭研究に就て、彼の予て期待していた、コロンビア大学のグードセル女史の家族及家庭論の講義、ボストンのヒリー博士の児童調査所の事業を此の新らしい関心において一層聴きのがし見のがすことがなかった。グードセル女史の講義にはその著書によって与えられる以上のものがあつた。ヒリー博士の研究所では、特に家庭環境の総合的ケースワークの實際処理について、期待以上のものを学んだ。その他、当時のアメリカの新問題の一つであつた少年審判所の實際と研究とは、少年の心理学的問題の外に社会学的家庭問題に重きをおく点において、多くの新しい考察点を教えられた。但し、それは社会問題として、当然家庭の教育機能の欠陥の方面に傾いていた。欠陥家庭の研究はアメリカにおいて、当時最も憂えられていた緊急事項であつたが、同じく我国にも持ち帰るべき必要があつた。殊に彼のようない理想主義家庭教育観の所持者には、社会現実に対する鋭い目を

養われるところが多かつたのである。しかし、彼のより多く求めるものは、矢張り、家庭生活の理想的方面の事例であつた。彼は予て本で読んだニユーイングランド・ホームとか、話に聞いた英国の上品な家庭とかの實際をくわしく知りたいのであつた。そして、その機会を失しないように心がけたのであつたが、欧米の家庭は外国人には容易に知り難い。良家庭であればある程そうである。彼は人をたよりに一端をのぞいただけで、長期の外国生活者のように、真髓をつかみ得なかつたことは遺憾であつた。アメリカでも、イギリスでも、殊にドイツにおいて、彼はそれ／＼一応のよき家庭の客となることができたが、それは皆合憎子供のいない家であつた。子供のいる家では、外国人を入れて呉れないらしい。そこで彼は、親と子供とが遊びに集る場所を漁って、せめても局外觀察を試みることに楽しい勉強をしたものだ。だが、そんな時、我が子を思うこと愈々切である。

* 本文は新漢字、現代仮名遣いにし適宜ルビを振りました。括弧書きにて脱字の修正もしてあります。(編集部)